

---

# セピア6 Never Give UP!

山本哲也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セピア6 Never Give UP!

### 【Nコード】

N9718E

### 【作者名】

山本哲也

### 【あらすじ】

ストーリー：体育祭でのリレーで何かに目覚めた(?)亮太は、美雪を初デート(?)に誘うべく奮起する。しかし、と言うか何とというか、その前には数々の障害が立ちふさがるのだった…。

「武内君、起きて…」

柔らかい、暖かみのある声が亮太を呼んでいる。

(…う…ん…)

「武内君…」

美雪の声だ。

(…何だろ…起きなきゃ…)

そうは思うのだが、身体が思うように動かない。それに、美雪の声はまるで子守歌の様に心地よく響き、眠りを誘うのだ。

「武内君ってば…」

甘い、髪の毛の香りがふうわりと漂う。

(…このまま寝てたら優しく起こしてくれるかな…)

ぼんやりと霞のかかった頭でそんなことを思いながら亮太は夢と現の間をさまよっている…。

「武内い!!」

「はいい!!」

不意に、心地よい美雪の声が岩口先生の怒鳴り声に変わり、それと同時に亮太は飛び起きた。

寝ぼけ眼で辺りを見回すと、教室のあちこちでクスクスという笑い声が広がっている。

そして、正面には苦虫を百匹ぐらいかみつぶしたような表情の岩口先生。

今、自分がどういう状態に置かれているかはさほど察しのよくない亮太でも瞬時に理解できる。

『また』授業中に寝ていたのだ。

まあそれはいつもの事なので、より正確には『授業中寝ているところをまた先生に見つかった』と言うべきかも知れない。

亮太は大抵の授業の時間を漫画を読んだりするか、寝るか、落書

きをするかで過ごしている。それでも見つからない（見つけても注意しないのかも知れないが）場合もあるのに、この岩口先生と亮太はとにかく相性が悪いらしく、寝ていようが、漫画を読んでいようが、落書きをしていようが、いつも見つかってしまうのだ。特に先生は亮太達のクラス、二年C組の担任でもあり、前回、体育祭のリーダーの選手にさせられたのも、遅刻一回を帳消しにするという取引をしたためだ。うかつに負い目を作ると今度は何をさせられるか、分かったものではない。生徒会の現執行部の引退も近いし、無理矢理生徒会にでも立候補させられたらたまったものではない。

おかげで、この岩口先生の数学の時間は亮太にとって特に鬼門だった。

授業の度に寝るか漫画を読むかしていればいい加減マークされるのも当然だが…。

岩口先生はふうつと溜め息をつくとき、いつもの飄々とした表情に戻った。

「…武内、おまえが数学が得意なのはよく分かる。こんな簡単な内容など聞くまでもない、というの难道？ だがな」

そう言いながら先生は亮太の真横に立った。並んで立つと先生は亮太よりいくらか背が低い。

「あのすばらしいテストの結果はどういう事かな？ テストで結果を見せてくれん事には評価のしようもないぞ。それとも、あれしきのテストでは実力を出す気にもならん、と言うのかね？」

先生はそこで一息つき、ニヤリと笑う。

「ま、期待してるぞ、武内君」

そう言うと、先生は亮太の肩をポンポンと叩き、亮太を座らせた。

「…そうそう、そろそろ生徒会の選挙もあるし、文化祭の実行委員も決めないとなあ…」

亮太に背を向け教卓の方に戻りつつもわざと聞こえるようにそう呟く。いつの間にかクスクスという笑い声が控えめに響き、亮太は恥ずかしさで顔が真っ赤になるのを感じていた。寝汗に代わって、

身体中からどつと汗が噴き出ている。亮太はぱたぱたと下敷きで仰ぎ…先生と視線が合ったので慌てて止めた。

「じゃ、綾瀬、前に出てこの数式解いてみる」

教卓の所に戻った先生が黒板に書かれた数式をコンコン、とまるで黒板をノックするかのように手の甲で叩きながら示して美雪に告げる。

「あ、はい」

美雪は立ち上がって黒板の前に行き、カツカツというリズムカルな音を立てながらすらすらと黒板の数式を解いていく。亮太はその白い、ほっそりとした手の動きに思わず見とれてしまう。

先生は書かれた数式を満足そうに見つめると、大きく を付けた。

「ふむ、模範的回答だな。座ってよし」

(…やっぱり綾瀬さんはすごいよなあ…)

席に戻る美雪の姿を目で追いながら、亮太はぼんやりと思う。特にとどの教科が得意だ、とか、苦手だ、という話は聞いたことがない。だからといって、運動が苦手でない事は競争の激しいテニス部でレギュラーの座を獲得している事からもうかがえる。

(…成績優秀、スポーツ万能、おまけに容姿端麗、か…)

一年生の頃、違うクラスだった時でさえその存在は知っていた。

それほど、美雪は学年の男子の噂の種だったのだ。もちろん、亮太が美雪のことをハッキリと認識するようになったのには別の原因があるのだが、入学してからいくらかも経たないうちに『組の××が告白して振られた』という噂を何度も耳にしていた。その頃は「ああ、すごい人がいるんだな」位にしか思っていなかったのだが…。それに引き替え自分ときたら。

成績赤点、スポーツ無能、容姿は…まあ人並み、と言うことにしておこう。

その差は歴然としている。…比べるものでもないかも知れないが…。

果たして、彼女は振り向いてくれるだろうか？

柳井を筆頭にして、恐らく両手では数え切れないほどの彼女に言い寄る男達をさしおいて…。

どう考えても勝ち目のない勝負にしか思えない。

(だったら、諦めるか？ 諦められるか？)

答えはNOだった。美雪の口から、NOと言われぬ限り。

もう、挑戦する前から投げ出すのは止めたのだ。

あとはただ、挑戦するだけの勇気が出てこないだけで。

(…勇気、か…)

亮太は心の中で長い溜め息をついた。

キーンコーンカーンコーン…。

チャイムの音とともに、教室内に音と、和やかな空気が戻ってくる。

「はあ」

やれやれようやく終わった、という意味の長い溜め息をついた亮太の側に、真吾がやってきた。

「おいおい亮太、いったいどんな点取ったんだよ」

そう言って、ニヤニヤ笑いながら真吾は亮太の肩をポンポンと叩く。

「…そんな嬉しそうな顔しやがって…お前とそんなに変わんないだろ。つたく、どうして俺だけ…」

真吾の方を横目で見ながら亮太は呟く。と、またうるさいのがやって来た。

典子だ。

「ちよつと亮太、いったいどんな点取ったのよ？ 数学は一緒に勉強したじゃない」

「…そんなに悪い点だった覚えはないんだけど…」

亮太としてはそれほど悪い点ではなかったつもりだったのだが…。もちろん世間一般から見て、いい点である、と言えるはずはない

のは確かだが。

「あの分じゃ先生、また亮太に何かやらせるかもよ」  
心配そうに典子が呟く。亮太もその意見に賛成だった。  
このままではまたやっかいなことを押しつけられかねない。もう  
少しまともな点を取って、ターゲットから外れなければ。

黒板の脇にかけられたカレンダーを見ながら、亮太は心のなかで  
先生を呪った。

今日は金曜日、何といつても、期末テストまでは後二週間ほどし  
か残されていないのだ。

窓から外を見ると、遠くの空に真っ白な入道雲が浮かんでいる。

黙っていてもじつとりと汗ばむほどの暑さだ。制服が夏服に替わ  
ったのがついこの間だったような気がするが、早くも暑い夏が本格  
的にやってこようとしているのだ。

(何にも出来ないうちに、早くも夏休み、か…)

亮太はもう一度、溜め息をついた。

黄昏が辺りを包み込んでいる。

議事録を書き込んでいたノートから顔を上げ、美雪は窓の外をぼ  
んやりと眺めた。

赤く色づいた街並みと、グラウンドから聞こえてくる部活動の掛  
け声。そして、遠くに見える街並みは次第に闇に沈み込み、それに  
代わってぼつぼつと灯が浮かび上がっていく。

それが、生徒会室の窓からの眺めだった。

藤ヶ谷学校が高台に位置しており、しかも生徒会室は街の側に面  
した一号棟にあるため、ちょうど街を見下ろすような恰好になって  
いる。一号棟には他には職員室や理科室などの特別教室しか入って  
いないため、普段はあまり目にする事が出来ない眺めだ。

今まであまり気にすることもなかったが、後暫くで見納めになる  
と思うと何だか少し勿体なくも思えてくる。生徒会室に残っている  
のはさつき、美雪、柳井の三人だけで、他の役員たちは早々と引き  
上げていたり休んでいたりしている。そのせいもあってか何となく

物悲しく思えさえした。

といつても、もう一度生徒会の役員に立候補して当選しさえすれば見られることにはなるのだが。

(立候補：)

その言葉がふと昼間の情景を思い出させる。

亮太が先生にたしなめられていた、あの情景だ。

(武内君：大丈夫かしら：)

「どうしたの？ 美雪ちゃん？」

ぼんやりと外を見ていたせいだろうか、側で書類をまとめていたさつきが怪訝そうに声をかけてくる。その声で美雪は物思いから引き戻された。

「え？ あ、いえ：」

美雪は曖昧に微笑んで誤魔化す。

「そんなに名残惜しければもう一回やればいいのよ。今度は生徒会長なんてどう？ 美雪ちゃんなら絶対大丈夫よ」

さつきは悪戯っぽく微笑んだ。

「いえ、とてもそんな：」

「ま、それなら後継者探しに色々苦労したりしなくてすみませぬ、側で書類整理をしていた柳井が手を休めて口をはさむ。生徒会の役員などというものは今日日なりたいという人間があまりいなくて、代替わりの際にはいつも、次のなり手を探すのに苦労するのだ。

ちなみにさつきと柳井だけは例外で、自分から立候補したクチ。

美雪は周りに勧められてなったのだった。

「もう。そんな事言うなら柳井君がなればいいじゃない」

美雪が言い返すと、柳井は肩をすくめてそれに答える。

「もう十分貢献したさ。副会長の重責を一年間もこなしたんだからね。一年間で三年分の気力を使い果たしたよ」

「別に部活やってるわけでもないじゃない。さつき先輩なんてバレー部のキャプテンしながら会長してたのよ」

「そりゃ歳の差って奴だね」

「あら、それどういう意味？ 柳井君のほうが若いでしょ？」  
柳井のおかしな言いぐさに、さつきが尋ねた。

「いやいや。何しろ運動もロクにしませんからね。身体がすっかり退化して、今じゃ隠居の気分ですよ」

「何それ？ 一年生の女の子たちと仲良くしているところ見てるととてもそうは思えないけど？」

悪戯っぽく微笑んでさつきがやり返す。

「気持ちだけは若いんで」

しれっとして柳井が答え、にやりと笑った。それにつられてさつきも美雪もクスリと笑った。

「でもホントにこうして柳井君の変な話を聞けるのも最後ね。美雪ちゃんともかく、あたしはこれで引退だもの」

先程美雪が見ていた窓の外の景色を眺めながら、さつきが感慨深げに呟く。その表情は遠くを見ているというよりもむしろ、記憶のなかの景色を見つめているようだった。

「さつき先輩はどうして生徒会に立候補したんです？」

唐突に柳井が尋ねる。さつきはちよつと戸惑ったように曖昧に微笑んだ。

「ま、色々あるけど、一番は何かやりたかったから、かな。自分の手で」

さつきは首を傾げながらそう答える。柳井が続けて尋ねた。

「やりたかったことは出来ました？」

「…なかなか追求が厳しいわね」

そう言っただけ微笑むと、さつきはふうつと溜め息をつき、続けた。

「…でも、そうね、自分としては精一杯やったつもり。後悔はしてないわ…。これで満足？」

さつきはそう言っただけ悪戯っぽく微笑む。柳井は苦笑いして答えた。

「やだなあ、さつき先輩、ちよつと興味があっただけですよ。別に他意はありませんって。先達の貴重な体験を参考にしたいと思いましてね」

「言ってくれるじゃない？ さつきは隠居の気分とか言ってたくせに」

そう言いながらさつきは柳井を軽く小突く。

「さ、もう一頑張りしちやいましょ。あんまり時間潰してると美雪ちゃん達の乗るバスがなくなっちゃうわ」

美雪達をそう促し、さつきもやりかけの仕事の方に意識を戻そうとする。

だが、ふと思いつてもう一度、辺りをぐるりと見回した。

(…ホントに、後少しでお別れね…)

再び机の方に向き直ったさつきの口元が、微かに寂しげな微笑みを浮かべていた。

珍しく、部屋で亮太が勉強している。

机の上に長らく積み重ねられていた漫画本や漫画用の道具などを取り敢えずベットのの上に疎開させ、ようやく机の上に作り出した教科書1冊分弱のスペース。

そこに窮屈そうに置かれた教科書を前にして、亮太は椅子の上であぐらをかき、ついでに腕組みまでしてそれを眺めていた。

教科書に書かれている文字の上を何度も目がなぞる。それでもダメならと、声に出して読んでもみる。

『関数  $y=f(x)$  がある区間  $I$  で定義されているとする。  $a$

$R$  と  $x \in I$  に対して  $x$  が限りなく  $a$  に近づくとき、  $f(x)$  が  $b$

$R$  に限りなく近づくならば、  $x \rightarrow a$  の時  $f(x)$  は  $b$  に収束するといつて…』

「…むー…」

教科書をベットのの上に放り投げると、髪をくしゃくしゃと掻きむしりつつ亮太はうめき声を上げた。

「何の事だかさっぱり分からん…」

$x$  だの  $y$  だの だの、ほとんど外国語の文章を読んでいる気分だ。そもそも、って一体何と読むのだろうか？

亮太は椅子から立ち上がると、どさりとうつ伏せでベツトに倒れ込んだ。憎つくき教科書にボディプレスをかましてやるのだ。

それから、ごろりと仰向けになり、暫くの間ぼんやりと白い天井を見つめている。

『ま、期待してるぞ、武内君』

天井がまるでスクリーンになっているかのように岩口先生の顔が浮かび、ニヤリと笑う。亮太は天井に枕をぶつけて幻想を追い払うと、寝返りを打ち再びうつ伏せになった。

「…」

「…」

暫くの後、ごそごそ、と身体の下をまさぐり、再び教科書を取り出す。そしてまたページを開いた。

『…この時、 $b$ を $f(x)$ の $x$   $a$ に対する極限值と言う。』

「…」

「…」

再びぱたりと教科書を閉じると、亮太は布団に顔を埋めた。

やっぱり何だか分からない。こうなるともう数式を見ただけで頭が拒否反応を起こし、思考停止してしまうようだ。

「…ダメだこりゃ…」

半ば絶望的な気分になってそう呟くと、寝返りを打って再び天井を見上げた。

(…まあいいか、留年するんでなけりゃ。大体、微分だの積分だのなんて実生活じゃ使いつこないんだから無駄なんだよ)

自分の手の届かないところにあるものは大した物ではない、という『酸っぱいブドウ』の心理だ。

大抵の数学が苦手な人が考えるのと同じように考えて自分を納得させると、亮太は天井に浮かんだ岩口先生の顔に向かって思い切り舌を出す。

ふとその時、黒板に向かってなめらかに数式を書いていく美雪の後ろ姿が浮かんだ。

(…それにしても、綾瀬さんはすごいよな…)

うつとりとした気分、亮太は流れるようなその白い、ほっそりとした指の動きを思い出す。その時、ふとあることに思い当たった。

「あー!!」

思わず亮太は声を出し、がばつと跳ね起きる。

「…そうか…これなら…」

熱にでも浮かされたようにひとしきり自分自身で納得して頷くと、亮太はベットのうえであぐらをかいて一人ニヤニヤとほくそ笑む。もし、こんな亮太の姿を美雪に見られてしまったら、亮太が美雪に対して抱いているわずかな希望も跡形もなく吹き飛んでしまったらう。

その時、亮太の頭の中では様々な計画 というより、途中からはただの妄想 が猛烈な勢いで渦巻いていたのだ。

しかし、往々にしてそうであるように、亮太のその計画の前にも数々の困難が待ち受けていたのだった。

もちろん、亮太はそんなことなど知る由もない。

さてその翌日。

ある決意を胸に、いつもよりは早く、つまり、遅刻しない程度に早く、学校に着いた亮太は、気合い十分、上履きに履き替え教室に向か…おうとしたところで早速障害にぶつかった。

「きゃーっ!! 武内センパイ!!」

まさに黄色い声、という表現がぴつたりと嬌声と共に、背中にドシンと何かが体当たりしてくる。

そしてその『何か』はそのまま亮太に抱きつくような格好になった。

「先輩、格好良かったです。久美子、感動しちゃいました」  
漫画研究会の後輩、高梨久美子だ。

久美子は抱きついたまま嬉しそうに顔をすりつけてくる。小柄な久美子はちょうど亮太の胸の辺りに顔が来るのだ。

亮太はまるで大きな犬にでもじゃれつかれているような気分だった。

「や、止めろって!!」

「綾子ちゃんも有香ちゃんも聡美ちゃんも、みんな『カツコイねー』って言うてましたよ。だから、久美子、『あれは久美子の先輩なんだぞ〜』って、自慢しちゃいました〜」

「だ、誰が『君の』先輩だーっ!」

「セ・ン・パ・イ・に決まってるじゃないですか〜。もう、照れちゃって〜」

そう言いながら久美子は亮太の背骨の辺りをつつーと指でなぞる。亮太は全身に鳥肌が立つのを感じて悲鳴を上げた。

「のわーっ!!」

そして、さらなる災厄が亮太を待ち受けていた。

「武内い!!」

突然響いた大音声に、亮太も久美子もびくつとして背筋を伸ばす。恐る恐る振り返った二人が見たものは…体育教師にして生活指導も熱心に行っている、村上先生だった。

「…あ…これはそのー」

いつの間にか久美子は亮太の背中に隠れてしまっている。先生はものすごい形相で亮太を睨んでいた。

(…お、俺は悪くないのに…被害者なのに…)

心の中でそう呟くが、さすがにそう言うて久美子突き出すわけにもいかないし、第一先生が信じてくれるとも限らない。

「…貴様…学校の玄関で堂々と不純異性交遊とは…いい度胸だな…」

「いやだからそれは単なる誤解で…」

無駄とは知りつつも、亮太は説明を試みる。

「問答無用! 二人とも、こっちへ来い!!」

耳を引っ張られて連れて行かれる亮太と、腕を捕まれる久美子。

「イタタ、痛いつスよ、先生…」

そううめきながら、この違いは一体何なのかと亮太は思っていた。

「…イですよええ」

ふくれっ面の久美子が、同意を求めるように言う。

「え？ 何だって？」

耳がじんじんしびれていて、久美子の声が良く聞き取れない。亮太は耳に手を当てて聞き返した。

「何にもこっちの言い分聞いてくれなくて、それでああもくどくど怒鳴るのってヒドイですよねって言ったんです」

「…ああ…」

元はと言えば誰のせいなのか、と言いたところだったが、止めておいた。

あれから五分ほどの間、亮太と久美子の二人は生活指導室に呼ばれてさんざん説教されていたのだ。チャイムに救われなかつたらまだ続いていたことだろう。それでも、間近で怒鳴られていた亮太の耳は半分麻痺したような状態だった。

「ぶー。先輩、まじめに聞いてない」。いいもん、先輩なんか知らないんだから」

気のない亮太の態度に久美子がへそを曲げ、ぽかぽかと拳で亮太の背中を叩く。

「いてて。止めろって。あの先生は生徒を怒鳴るのが生き甲斐なんだから何言っても無駄なんだよ」

「ぶー」

納得していないのか、久美子はまだふくれている。亮太は軽く溜め息をついて言った。

「ほら、教室に着いたぞ」

「先輩、今日はちゃんと部活に出ます？」

教室のドアを開けた久美子が振り返り、尋ねる。

「んー分かった分かった」

「あー、先輩またサボる気でしょ」

気のない返事を返し、ダダをこねる久美子を教室に押し込もうとした時、突然教室内から黄色い嬌声が上がった。

「きゃ〜久美子、同伴出勤〜？」

「ね、あれってこの前のリレーの人じゃない？」

「え〜？ うそ〜」

次々にわき起こる女の子達の会話に恐れをなした亮太は、久美子を教室に押し込むと早々に逃げ出す。

その耳に、一時間目の授業開始のチャイムが鳴っているのが聞こえてくる。

亮太の立てた計画はしょっぱなから崩れてしまったのだ。

自分の教室に向かって駆け出しながら、亮太は心の中で溜め息をついていた。

だが、亮太の災難はそれで終わったわけではなかった。

「あ、ちよつと、武内君」

教室に入り、何とか間に合ったと安堵する間もないままに、坂本女史に呼び止められたのだ。

「な、何？」

不吉な予感を感じつつ、恐る恐る尋ねる亮太に、女史はノートを押しつける。

「『何？』じゃないの。武内君、今日日直でしょ」

そう言いながら女史はメタルフレームの眼鏡の奥の視線を黒板の方に向ける。その『日直』の欄にはきっちりと亮太と、女子の日直、西村友希の名前が書かれていた。

「えー」

うんざりしたような声を出す亮太をじろつと睨み、女史は

「何か？」

と尋ねる。

「い、イヤ、何でも」

亮太は慌てて首を横に振った。女史の機嫌を損ねるのはあまりにも無謀だと言うことを、このクラスの男子なら誰でも知っている。

こんな大事なときに何でまた…と天の采配を呪いつつ、亮太はもう一人の日直である西村の席へ行く。

「あー」

「あ、武内はん。今来はったん？」

熱心にネガフィルムを光にすかして選んでいた西村が顔を上げ、ホツとしたような顔になる。西村は新聞部に所属していて、なかでもカメラの扱いが上手いので体育祭など、行事の度にあちこちから撮影を頼まれるらしい。

「いや、まあ…。ところで、これ、お願いできる？」

ゴシツプになりそうな話題も西村には禁物だ。亮太は適当に誤魔化しながら日誌を見せた。

「ええけど…そこ置いといて」

相変わらずネガフィルムを光にかざしながら、西村は上の空で答える。

「アリガト。他の、弁当の注文のとりまとめとかは俺がやるから」

「おおきに」

気のない返事だけ返す西村に日誌を預けると、亮太は自分の席に戻る。と、そこには既に弁当の注文を書いた紙袋がいくつも置かれていた。

藤ヶ谷高校には学食も購買もあるのだが、一部の弁当やパンなどに関しては注文用のリストが印刷された紙袋に名前と注文品を書き、それに代金を入れて日直に渡すと日直がそれをとりまとめて注文する、という制度もある。品が固定されてしまっているのと、品切れだと不人気商品に切り替えられたりすることが多々あるので亮太はあまり利用しないのだが。

「…」

その山を見て亮太は思わず溜め息をつく。大抵、この仕事をやると午前中の休み時間は全てつぶれてしまうのだ。

(…お、俺の計画が…)

久美子と言い、この日に日直に当たった事といい…。あまりにも見事な天の采配に、亮太は悪意を感じずにはいられなかった。

だが、亮太は気を取り直して決意を新たにす。

(Never Give UP!!)

亮太の目は、燃えていた。

そして、次の休み時間。

注文はこの時間までで締め切つて、次の休み時間には購買に注文に行かなくてはならない。そのため、亮太の周りでは何人もの男子生徒が注文袋を持って亮太がそれを受け取つて処理するのを待っている。本来はもう一人の日直である西村と分担するはずなのだが、亮太の出した交換条件のせいなのか、西村の姿は教室内にはなかった。

「こら、野田、まだ計算終わつてないんだから勝手にお釣り持つてくなよ」

「広瀬。万札は止めるよ」

「高瀬、リストにないの頼むなよ」

机の上にたまっていた注文袋の内容をリスト化し、またお釣りの必要なものへの処理でてんでこ舞いの亮太の元に、また一枚の注文袋が届けられた。

「ほい。宜しく」

そう言つてニヤニヤしながら注文袋を差し出したのは真吾だ。真吾も亮太と似たり寄つたりの理由でありこの制度を利用することはなかったはずなのだが…。

「何だよ、お前、いつもは頼まないだろ」

亮太は仏頂面で真吾を見上げる。

「いーじゃん、たまにはさ。そういう気分の時もあるんだよ」

「ダメ。却下」

そう言つて亮太は袋を突つ返した。

「そりやないだろ」

「ダメ。ダメと言ったらダメ」

「…何やってるのよ」

二人が押し問答していると、手にルーズリーフと紙袋を持った典子がやって来てあきれ顔で言う。

「いや、亮太が差別するのさ」

「冷やかしに来てるのが悪いんだろ」

真吾に負けじと亮太が言い返す。真吾は典子が手にしている注文袋を見て、怪訝そうな顔で尋ね、ルーズリーフと注文袋を受け取る。

「ところで、典子も注文？ …おやまあ、こりやまた…」

「何よ」

妙に芝居がかった驚き方をする真吾を典子がふくれっ面で睨んだ。「俺の三倍は注文してるぜ、恐れ入ったね。その細い身体にこれだけ入るなんて」

そう言いながら真吾はニヤニヤ笑いながらじろじろと典子の身体を見つめる。そんな真吾を典子が叩いた。

「変態！ んなわけないでしょ。それ、クラスの女子全員分よ。」

男の子相手だと注文しづらいつて言う人もいるみたいで、あたしが仲介役頼まれたの。あ、こっちがまとめたリストね。お釣りとかはもう済ませてあるから」

「んなもの名前が書いてあるんだからどうせ分かっちゃうのにな」

リストに目を通しながら呟く亮太の頭を、典子がパシッと叩いた。

「それが乙女心っていうものなの。ったく全然分かってないのね、亮太ってばあたしがいないと全然ダメなんだから」

「いてーな、お前が乙女心っていうタイプかよ」

「何よその言い方ー」

「あのさ、仲がいいのは結構なんだけど」

ふくれっ面で睨み合う二人に、真吾が割って入る。

パシッ

途端に、真吾は両側から飛んできた拳を受け止めなければならな

かった。典子と亮太の二人分だ。

「…いや、だから、そろそろ休み時間終わるからさっさと…」  
キーンコーンカーンコーン…

真吾がそう言い終わらないうちに、チャイムが鳴り始める。と同時にそれは亮太の計画がまた一步実現から遠ざかった証でもあった。

(…俺の計画…)

亮太はまだ処理の済んでいない何枚もの注文袋を見つめ、溜め息をついた。

次の休み時間には注文をしに行かなければならないので、とても他に何かをする余裕などないのだ。

そして、昼休み。

チャイムの音と共に教室には活気が戻ってくるが、日直である亮太には早速弁当箱の蓋を取って…などという事は許されない。その前に、前の休み時間に注文しておいた弁当を取ってこなければならぬのだ。

亮太が机の上を片付け、立ち上がるうとした所へ西村がやって来た。一緒に弁当を取りに行こうというのだろう、と、亮太は一人納得する。

しかし、何故か、西村は弁当箱を片手に持っていた。

「あ、西村さん、ちょうどこれから…」

『弁当を取りに行こうと思ってたんだ』、と言おうとしていた亮太を遮り、西村はいきなり拝むような格好になる。

「スンマセン!!」

「へ？」

事情を理解できないでいる亮太を後目に、西村は一気にまくし立てる。

「いや、これからな、部室行って編集会議せにゃアカンねん。せやから悪いんやけど弁当取りに行くの、武内ハシ一人で行ってくれる?」

ゲ、何言つとるんやコイツ、と、つられて関西弁もどきになってしまう亮太だが、その口から出たのは

「…ああ、いいよ」

と言う言葉だった。

「ホンマか！？ おおきに！！」

それだけ言うと、西村は教室から飛び出していく。その後ろ姿を見送りつつ、亮太はまた溜め息をついた。

「おーい武内ー、早く弁当持ってきてくれよ」

そんな亮太に追い打ちをかけるように野田が大声で言う。

「…ハイハイ」

溜め息混じりにそう答え、グウグウと自己主張するお腹をなだめつつ、亮太は教室を出た。

ふうふう言いながら亮太がクラス分の弁当を持って帰ってきたのはそれから五分ぐらい経ってからだった。

亮太の持ってきた弁当のほとんどは待ちかまえていた男子生徒達によって瞬く間に持って行かれ、残りいくらかは女子生徒がきわめて控えめに持つていく。漸く日直の責務から解放された亮太はへろへろの状態で席に戻った。

「あれ、亮太、一人でお弁当取りに行ってたの？」

手作りの弁当の包みを解きつつ、典子が怪訝そうに尋ねる。

「…え？ ああ。西村さん、何か用あったみたいだから」

上の空で亮太は答えた。亮太の関心は既に目の前の弁当箱の中身にのみ向けられているのだ。

ぐ〜きゅるる〜

亮太のお腹が催促の声を出す。典子が思わず吹き出した。

「相変わらず行儀が悪いわね。授業中なんてあたしの席まで聞こえてたんだから」

「ふふはいな（うるさいな）」

早速ご飯を口いっぱいにはおぼった亮太はそう言いながらも幸せ

そうにご飯を飲み込む。

「そればかり。… たく亮太ってばあたしがいないと全然ダメなんだから」

そう言いながら、典子は幸せそうに微笑んだ。

「ふう… ouchそうさま」

「ハイハイ、お粗末様でした」

それから暫くして、漸く人心地ついた亮太は辺りを見回す。だが、目当ての人物はいない。

「… あれ、綾瀬さんは？」

亮太が尋ねると、弁当箱を片付けていた典子の手がピタリと止まる。それから、典子は亮太の方を怪訝そうに見上げた。

「生徒会室の方じゃない？」

「あ、そうか」

そういえば、柳井の姿も見えない。亮太は自分がすっかりその事を忘れていたのに気づいた。

「… でも、急に、どうして？」

探りを入れるかのように典子が尋ねてくる。

「い、いや、別に」

また色々からかわれてはたまらない。亮太は適当に誤魔化すと、

「んじゃ、ouchそうさま」

そう言っつてそそくさと教室を後にする。

(…)

その後ろ姿を、典子は黙って見つめていた。いつの間にか手をきゅっと握りしめていることは、彼女自身、気づいていなかった。

その頃、亮太は一人ぶらぶらと廊下を歩いていた。特にアテがあるわけでもない。ただ、これ以上典子に突っ込まれるのを避けたかっただけだ。

(… ふう… 危なかった… 典子に知られたらまた色々言われそうだ

もんな…)

典子に悪気があるわけではないのは分かっているのだが、またいつかのように無理矢理状況を設定されてしまうのは願ひ下げだ。

(そうさ、もう俺は今までの俺と違うぜ！)

思わずガッツポーズを決めてしまふ亮太。その頭の中では妄想が次第に加速していく…。

『綾瀬さん、実はお願いがあるんだけど』

美雪の手を握り、美雪の目をじっと見つめてそう告げる亮太。

『いいわよ、武内君のお願いなら何でも…』

頬を桜色に染めた美雪は潤んだ瞳でそう答え、目をつぶる…。

(…『綾瀬さん、実はお願いがあるんだけど』…うん、これだよこれ、やっぱ最初はさりげなく、クールに決めないと…)

ニヤニヤしながら一人頷く亮太。心の中でその言葉を何度も繰り返し、すらすらと言えるように練習する。

「綾瀬さん、実はお願いがあるんだけど」

「あ、はい、何かしら？」

不意にすぐ側で美雪の声が聞こえ、驚いた亮太は後ろに飛びすさった。

「は！？ ひゃ！！ あ、ああああや綾瀬さん…」

「ご、ごめんなさい、驚かせちゃったのかしら…」

口をぱくぱくさせながらまるで幽霊にでも出会ったかのような表情で美雪を見ている亮太に、美雪の方がびっくりしたようだった。

その隣には柳井が呆れたような表情で亮太を見つめている。

「で、でも、『お願いがある』って言ったから…」

「あああ、い、いや、何でもないんだ。じゃー！！」

それだけ言うと逃げるように教室にすっ飛んでいく亮太の後ろ姿を、柳井と美雪は呆気にとられた様子で眺めていた。

「…なん…だったのかな…」

美雪が傍らの柳井に尋ねる。

「んあ…」

だが、柳井も首を傾げるばかりだ。

キーンコーンカーンコーン…

頭上のスピーカーから、聞き慣れたチャイムの音が聞こえ始めていた。

ピシャン！

派手な音を立てて教室のドアを閉めた亮太に、クラス中の視線が集まる。まだ予鈴のため全員が教室に戻っているわけではないが、それでも二十人以上はいる。亮太は途端に恥ずかしくなつて精一杯身体を縮め、こそこそと自分の席へ向かう。どつと汗が噴き出していた。

「どうしたのよ亮太？ 何かあつたの？」

「…いいいや、何でもない…」

耳まで真つ赤にした亮太は席に着いてからも人目を避けるように精一杯身体を縮め、特に出入り口のドアの方を見ないようにしていた。

「何でもないって…」

典子がおかを言いかけた時、ガラガラとドアが開いた。一瞬そつちの方を不安げな視線でちらりと見た亮太は、入ってきたのが安藤だと知ると少しほつとしたような表情になる。

「…誰かと喧嘩でもしたの？」

「ち、違うよ」

亮太の顔を心配そうにのぞき込もうとする典子の視線を避けるように、亮太は机に突つ伏した。

「じゃどうしたのよ？」

「何でもないってば！」

二人がそんな会話をしていると、再びドアが開き今度は柳井と美雪が入ってくる。一瞬そちらの方に視線をやっていた亮太は、サツと視線を逸らした。

「…」

キーンコーンカーンコーン…

何かを言いかけた典子を遮るように本令が鳴る。

典子は机に突っ伏したままの亮太の様子を見てそのまま口をつぐむと、後ろ髪を引かれる思いでそのまま自分の席へと戻った。

(…あーっもう、どうしてこう失敗ばっかなんだ…)

次の授業時間中、亮太は自己嫌悪と苛つきのためただ中にいた。前日、自分で立てた計画が(亮太の考えたものが果たして『計画』等と呼ばれる代物であるかどうかはともかく)最初の段階から躓いてしまっているのだ。心が安がるはずもない。

(…残りあと一つの休み時間で何とかしないと…)

残されたチャンスを目指折り数えてみる。しかし、それは苛立たしさを増す以外には効果がないようだった。

(…とにかく、何とかしないと…)

亮太の頭の中ではそればかりが空回りしている。こんな時は一旦冷静になる必要があるのだが、悲しいかな今の亮太にはそこまで考える余裕がないようだ。

もちろん授業の内容など頭に入っていようもない。

もつとも、それは今回に限ったことではないのだが…。

キーンコーンカーンコーン…

授業終了のチャイムが鳴る。

亮太は挨拶もそこそこに美雪の許へ…行こうとしたところを、西村に止められた。

「ちよー待ちいな、武内ハン、どこ行くん？ センセにプリント

配るから職員室まで取りに來い言われてるやる？」

「え？ あ、そうだったけ？」

そんな事全然聞いた覚えがない。初耳だ。もつとも、亮太自身、自分が聞いていないだけであるう事は認めていた。

「しっかりしいな。いくで」

西村はあきれ顔でそう言うと、亮太の腕を引っ張る。

「あ、う、うん…」

何もすることが出来ないまま、亮太は半ば引きずられるようにして教室から出、職員室へ向かう。

(あーっ！ もうどうしてこんな時に…)

遠ざかる美雪の姿を思いながら、亮太は自分の運の悪さを呪っていた。

半ば引きずられるようにして教室から出ていく亮太の様子を、自分の席に座ったまま、典子がそつと伺っていた。やがて亮太が教室から出て行ってしまつと、暫く何か考えているような、決めかねているような表情をしていたが、やがて決心したのかおもむろに立ち上がった。

それからの亮太はいつになくテキパキと働いていた。

職員室で先生から受け取った大量のプリントをあつという間に仕分けし、それを配っていく。傍らで同じ作業をしていた西村も目を丸くした程だ。

「なんや、結構いけるやない。いつもはちよつとドン臭く思ってたけど」

西村がニヤニヤ笑いながら冗談とも本気ともつかぬ様子で言う。

だが、今の亮太の耳にはそんな言葉も入ってきてはいなかった。

(早くしないと時間が…)

今の亮太の頭の中は、ただそれだけだったのだ。

「武内君？ 何か用があるんだつたらわたし達が代わるけど？」

そんな亮太の様子に気がついたのか、安藤を引き連れた坂本女史が声をかけて来る。女史はともかく、安藤自身は余り乗り気でないようで、イヤそうな顔で亮太を見ていた。

「あ、いや…」

そうしてもらいたいのには山々なのだが、たとえ代わって貰ったとしてもその状況ではちよつと亮太の目的達成の役には立たないのだ。

「何言うてん。手伝つてもらったら早終わるやん」

そう言うと、西村は亮太の持っているプリントを二つに分け、分けた方を安藤に渡す。さらに自分の束も二つに分けると、一方を女史に渡した。安藤は心の中で溜め息でもついているかのようだ。

(…まあこれで早く終われば…)

いつにない女史の心遣いに感謝しつつ、亮太はプリント配りに精を出す。

そして、漸く配り終えようとしたところで…。

キーンコーンカーンコーン…

無情にもチャイムが鳴り始める。

「あああ…」

亮太は思わずその場にしゃがみ込んでしまった。

「武内ハン？ そんなにトイレ行きたかったん？ せやったら言うてくれたら…」

気遣わしげな西村の声は、絶望感に打ちひしがれた亮太の耳には届いていなかった。

そしてとうとう、最後の授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

この頃には、もう亮太はすっかり自分の計画を諦めてしまっていて、何も感じなくなっていた。

「武内ハン、ちょっと」

半ばふてくされながらのろのろと帰り支度をしている亮太に、西村が声をかけてくる。西村の手にはモップが握られていた。日直の最後の仕事として、教室の掃除とゴミ捨てをしなければならぬのだ。

(あ、そうか…)

何の気なしにモップを受け取ると、西村は続けて例の『お願い！』姿勢になる。

「スマン、武内ハン、一生のお願いや」

「…な、何？」

何だかイヤな予感がする。

亮太は反射的に身構えてしまう。

「ウチ、これから写真を現像に出しに行かなアカンのん。せやから…」

掃除を宜しく、と言う事か。

「…いいよ。どうせヒマだし」

半ばヤケになって亮太は答える。もうどうせみんな帰ってしまった後だったし、亮太の『計画』もダメになってしまった所だ。

「ホンマ!? おおきに! 一生恩に着るさかい。ほな」

そう言うのが早いのが西村は鞆をひつつかみそそくさと教室を出ていく。その後ろ姿を見送りながら一つ大きな溜め息をつく。亮太はごく消極的な様子 言い換えれば非常にイヤそうな様子で 掃除を始めた。

「何が『ホンマ!?』だよ、ハナっからアテにしていたくせに…」  
ぶつぶつと呟きながらもちり取りでゴミを集め、ゴミ箱に捨てる。  
ゴミ箱は弁当屑や紙屑などのゴミであふれかえらんばかりだ。

「…ふう…」  
それを見て亮太はもう一度溜め息をつく。それから、おもむろにゴミ箱を持ち上げると、よたよたと歩き始めた。

ゴミがあふれそうになっているので歩きにくいのだ。

モップでも使って押し込んでおけば良かったと後悔しつつ、亮太は慎重に歩いていく。特に一番上に載った紙屑が今にも落ちそうだ。  
「つとと…よっ…はっ…」

落ちないように、あっちへ行ったりこっちへ来たりとやっていたのだが、ついにその紙屑がポトリと落ちた。

「ちえ…」

仕方なくゴミ箱を置いてそれを取ろうとしたところで、脇からひよいと手が伸びてそのゴミを拾い上げる。

「あ、ありが…!!」

お礼を言いかけた亮太の声が途中で詰まり、心臓の鼓動が跳ね上

がる。

そこにいたのは、誰あろう美雪自身だったのだ。

「お疲れさま。武内君一人なの？」

そう言いながらにつこりと微笑むと、美雪は拾ったゴミをゴミ箱に入れる。その拍子に、亮太の鼻孔をシャンプーの甘い香りがくすぐった。

「武内君？　どうかしたの？」

ぼんやりとしている亮太に、美雪が怪訝そうな表情を向ける。

「え？　あ、う、ううん、何でもないよ」

漸く、自分が美雪に見とれていた事に気がついた亮太は慌てて誤魔化した。

「西村さんは？　教室？」

「い、いや、彼女は用があるとかで先に…」

ドキドキしながら漸くそれだけ答える。喉がカラカラだった。そして、頭の中では『チャンスだ！』と言う声がしつこくこだましている。

「じゃ、武内君一人なの？」

ちよつとびっくりしたような様子で、美雪が聞き返す。亮太はまるで機械仕掛けのロボットのようになぎこちない仕草で頷いた。

美雪は『まあ』という仕草で口元に手をやると、

「代わりましょうか？」

と尋ねてくる。

「え？　あ、い、いや、大丈夫だよ、これくらい…」

「でも…」

「ほ、ほとんど紙ゴミだから。ほら」

そう言いながら亮太はゴミ箱をつとめて軽そうに持ち上げ、ブンブンと振ってみせる。その拍子にさっきの紙屑がまた床に落ちた。

「あ」

美雪はクスリと笑い、その紙屑を拾い上げる。

「…じゃ、あたしはゴミが落ちたら拾うね」

「…あ、うん、じゃ、お願いします」  
亮太もつられて微笑んだ。

ゴミ捨て場に無事にゴミを捨て終わった二人は、ぶらぶらと歩きながら教室へと戻っていた。授業が終了してから暫く時間が空いたせいか、廊下にはほとんど人影も見られない。ゴミ捨て場は玄関とは反対側、亮太達の教室のある棟の一階の駐車場の側にあるからだ。上の方の階から響く管楽器の音はブラスバンド部が練習している音だろう。こちらの方の棟は校庭からも離れているため、野球部などの練習している音は微かにしか聞き取れなかった。

(…な、何か喋らなきゃ…)

傍らを黙ってついてくる美雪のことを意識しながら、亮太は焦っていた。あれから全然話をしていないのだ。このままでは呆れられてしまうかも知れない。それに、今日はさんざん苦勞して美雪に話しかけようとしていたのではないか…。

(ほら、言うんだ！ 今がチャンスじゃないか!!)

そうは言うものの思うように口が動かない。それに、心臓がドキドキしている。これではまともに声が出るかどうかも怪しい。

(早く!!)

「…っあ、あの…」

そう言いかけたところで、一年生だろうか、やはり同じようにゴミ箱を持っている男女の生徒たちが階段から降りてくるのが目に入った。

「え？ あ、ごめんなさい、何か言った？」

何か考え事をしていたのか、美雪が慌てて返事をする。

「い、いい、いやなにも」

咄嗟に亮太は首を振ってしまった。

先程の生徒達が亮太達の側を通り過ぎる。同じように日直なのだろう、二人で何事か楽しそうに話している。

(…俺もああいう風に出来たらなあ…)

亮太は心の中で溜め息をついた。他の人はともかく、相変わらず美雪に対しては変に意識してしまうと言うか、何というか、とにかく緊張してしまつてまるでダメなのだ。

「…あー…ゴホゴホ」

「大丈夫、武内君？」

亮太が突然咳を始めたので美雪が気遣わしげな声をかける。

「あ、う、うん、ありがとう…ゴホゴホ…」

「ゴミ箱から塵でも舞つたのかしら…」

代わりにゴミ箱を持つとうとする美雪を手を上げて止め、

「も、もう平気だから。ありがとう」

と言う。実は声をかけようとしたのだが、声が裏返っていたので慌てて咳で誤魔化したのだ。

（しっかりしろよ！）

自分でも情けなくなつてしまう程だ。

そうこうしているうちに、二人は教室の前までたどり着いていた。美雪がドアを開けてくれ、亮太に先に入るように促す。

「あ、ありがとう」

もごもごと口ごもりながら亮太は教室に入り、ゴミ箱を置く。教室にはもう誰も残つていなかった。きつと、部活にでも行つたか、帰つたか、なのだろう。

「戸締まりも大丈夫。お疲れさま、武内君」

亮太がゴミ箱を置いている間に、美雪は窓の戸締まりを確認してくれていたらしい。窓の方からくるりと亮太の方に向き直ると、朗らかに微笑んでそう言った。

「…あ、ありがとう、何から何まで…」

その様子が何だか眩しくて、亮太はまともに見ていられずに俯いでしまう。

「やだな、別にお礼を言われるようなことはしてないわ。ほんのちよつとお手伝いしただけ」

美雪はそう言うてはにかんだように微笑むと、

「さて、それじゃあたしは戻るね」

そう言って教室から出て行くこととする。

「あ、あの…」

思わず呼び止めてしまふ亮太。美雪はキョトンとした表情で振り返った。

「何？」

「あ、いや、その…大したことじゃないんだけど…」

美雪の瞳に見つめられると、どんだん言葉が出なくなっていく。

亮太は俯いて口ごもり、やっとの思いで口を開く。

「…今日は、ありがとう…」

だが、それは亮太が言おうとしていた言葉ではなかったのだ。

「どういたしまして」

ちよっとの間怪訝そうな顔をしていた美雪は、すぐにそう言うてにっこりと微笑む。それから、くるりと踵を返した。

「あ！ もう一つ…」

ほとんど叫ぶようにして呼び止めると、美雪が振り返る暇もないうちに、亮太は一息で喋っていた。

「こ、今度の日曜、出来たら数学教えて貰えないかな、と思って…」

「え？ こ、今度の日曜日？」

漸く振り返った美雪は、キョトンとした顔をしていた。あまりに唐突だったので驚いたのだろう。

「う、うん。ほら、俺、数学全然ダメだから…」

「今度の日曜って…明後日よね？」

そう言いながら、美雪はちよっと考え込む。

「うん。あ、ダメなら、無理しなくていいから…」

「ううん、平気。その日はちよつど空いてるから…でも…」

「でも？」

何かを迷っているような美雪の様子に、亮太は思わず手をぎゅっと握っていた。

「…あ、いえ、あたしなんかで大丈夫なのかな、って。そんなに得意じゃないから」

美雪は慌てて答える。

「そんな事ないよ。すらすら出来るじゃない」

あれで得意じゃないんだったら亮太などはどうなってしまうのだろうか。亮太は力を込めて否定した。

「そ、そう？　ありがとう。で、どこですか？」

「え、えーと、図書館なんかどうかなって思ったんだけど…他に何かいいところ、ある？」

「…それって、この街のよね？」

美雪がそう確認する。

「あ、うん、そうなんだ。綾瀬さんの家の方にもあれば、それでもいいんだけど」

実のところ亮太は、『図書館』と言えば自分の住んでいるこの街の物しか考えたことがなかった。しかし、考えてみれば美雪が住んでいる街にはまた別の図書館があるだろうし、この街の図書館と一緒に勉強、と言うことはとりもおさず休みの日にわざわざ電車に乗ってこの街まで来なければならぬ、という事でもあるのだ。その事に思い当たった時、亮太は冷や汗をかく思いだった。誰が好きこのんでわざわざ休みの日にそこまでするのだろうか…。亮太の心の中で、半ばこの計画は諦められていた。

だが、意外にも美雪は断らなかつた。

「ううん、あたしの住んでいる街のは少し遠いの。こっこの街のなら、あたしも何度か行ったことがあるから大丈夫」

「じ、じゃあお願いしていいかな」

「ええ。ご期待に添えるかどうかは分からないけど」

そう言って、美雪は微笑んだ。亮太もつられて微笑む。

その後、待ち合わせ場所や時間を決めて、二人は別れた。

家に帰った亮太は、ニヤニヤしながら過ごしていた。あまりのう

れしさに、テレビの上に置いてあった黒猫のぬいぐるみを手に取り、いじくり回してしまう程だ。

上手くいった！

いくらニヤけないようにしようとしても、明後日のことを考えると自然と頬が緩んでしまうのだ。

そのため、日課にしているゲームにも手がつけられない状態だった。

（綾瀬さんと図書館で二人っきりか…）

なぜ「二人っきり」なのかは謎だったが、亮太の頭のなかでは勝手にそう思い込んでいる。

「この式にXを代入して…」

美雪の白い指がノートに書かれた式をなぞる。

「えーと、これ？」

「うん、それに…」

その瞬間、何気なく出した亮太の手と美雪の手が触れ合う。二人はまるで熱いものに触れた時のようにさっと手を引っ込め、暫しお互いの顔を見つめ合う。

いつの間にか二人の顔はお互いの息がかかるくらいに近づいているのだ。今初めてその事に気づき、そのまま無言で見つめあう二人やがて二人の顔の距離はさらに近づいていき…。

「ち、ちよつと亮太、何してるのよ!!」

突然、典子の素っ頓狂な声が響いた。ぎよつとした亮太が振り返ると、いつの間にか典子が買い物袋を手にもって部屋の入口に立っている。

「な、何だよ!？」

よもや心の中まで見通されたのではという、気まずい思いを隠すために少々ぶつきらぼうに答える。

「何って…それ」

そう言われて亮太が振り返ると、すぐ目の前に例のぬいぐるみがあつた。

「うわっ!!」

思わずそう叫んでぬいぐるみを放り投げる亮太を、典子が冷やかな目つきで見つめている。

「亮太、それにキスしようとしたのよ。何考えてたのかは知らないけど」

呆れた様子でそう言うと、典子は買い物袋をもって冷蔵庫の前に行く。そして袋の中身を冷蔵庫に入れ始めた。

「……」

気まずい思いでぬいぐるみを元の場所へ戻す。そんな亮太に、典子が声をかけてきた。

「ところで買い出しなんだけど、明後日でいい？」

「あ……いや、明後日はちょっと出掛けるからダメなんだ」

答えてから亮太はしまったと思った。美雪と約束する時、買い出しの事をすっかり忘れていたのだ。

亮太の食べる食料、つまりは典子の作る料理とほとんどイコールなのだが、の材料は、二週に一度ぐらい、大抵土曜か日曜辺りに近所のスーパーまで買い出しに行くことになっている。それが、ちょうど当たっていたのだ。もちろん、特に『この日』と決めていたわけではないので多少ずらしても問題はないのだが……。

「……そう」

典子はそう呟いたきり、黙々と冷蔵庫の中身を整理している。

亮太は何かいつもと違う感じがした。いつもならブーブー文句を言うか、少なくともどこへ行くのかぐらいは尋ねてくるからだ。

「……ゴメン。明日は夕方なら空いてるけど……」

「……あ、うん、じゃあ明日でもいいわ。……と言うより、その方がいいかな。もうお米とか全然ないから」

「……」

「何よ、その顔は」

そう言われて初めて、亮太は自分が怪訝な顔で典子を見つめていたことに気づいた。

「い、いや、何でも」

亮太は慌てて誤魔化すと、テレビに向かいゲーム機の電源を入れる。

「ちょっと亮太、またゲーム？ 試験勉強、やってるの？」

「や、やって…るよ…」

始めは勢いよく、終わりはごにごによとお茶を濁して答えた。

「ふーん、そう？ どこにそんな暇があるのかしら」

「うるさいな、放っとけ」

「べー。留年したって知らないからなーだ」

典子は舌を出しながらそう答え、材料の下ごしらえを始める。それを見て亮太はピコピコとテレビゲームを始める…それは、いつもと変わらない、夕刻の亮太の部屋の風景だった。

翌、土曜日。

学校が半日で終わり、今日の昼ご飯はどうしよう、などと考えていると、典子が声をかけてきた。

「亮太、今日、大丈夫？」

「あ、ああ。あんまり遅くならなければ。夜からバイトだから」

亮太は一人暮らしをしているという事もあって、学校側から特別に許可を貰い、叔父の経営するファミレスでバイトしているのだ。

「…バイトって、土曜は隔週位じゃなかったっけ？」

話を聞いた典子が怪訝な顔で聞き返す。

「うん、そうなんだけど。ただ、今は女の子が一人止めちゃって

…ほら、前に一度会ったことがあるだろ？ 可奈ちゃん」

典子はどこか遠くを見るような表情で暫く考え込んでいたが、やがて思い出したのか黙って頷いた。

「あの子が急に実家に帰らなくなっちゃなくなったんだ。他に、チーフやってた大学生の先輩も急に休んじゃったもんだから、どうしても出てくれて言われてて」

「ふーん。でもこれから試験なんだから適当にしないと大変よ。特に、数学は」

「分かってるよ。ちえ、どうせあんな数学なんか社会に出たら使わないのにな」

そう言いながらも、それが屁理屈でしかないのは亮太自身もよく分かっていた。

「また屁理屈言つて。成績悪かったらまた何かやらされるわよ、先生に。ま、そうなつても苦労するのは亮太だけどー。あんまり出来ないと美雪に呆れられちゃうわよ」

意地悪く微笑みながら典子が言った。

「うるさいな。それだけかよ。帰るぞ」

側を離れようとした亮太を、典子が止めた。

「まだあるの。はい、これ」

そう言つて典子が差し出したのは小さなバスケットだった。

「何？」

キョトンとした顔でバスケットを見つめながら亮太が聞き返す。

受け取つてみるとバスケットはそう重いものではない。

「サンドイッチ。お昼用にね」

「サンキュ。…でも、どうして今になって渡すのさ」

亮太としては典子に今まで何も言われなかったから今日は何も用意してないだろうと思つていたので。典子がこうして持つてきてくれたのは嬉しいことではあったが、どうせならもつと早く持つてきてくれれば…。

「それはね、亮太が考えていることをさせないためですよーだ」

そう答え、典子は悪戯っぽく微笑む。

「か、考えている事つてなんだよ」

「『もつと早く持つてきてくれれば途中で食べられたのに』って思つてたでしょ、今」

そう言いながら、典子は亮太のおでこを人差し指で軽くつつく。

図星だった。

「そ、そんな事考えてないよ」

「嘘。亮太、顔赤くなつてるもん」

「なつてないって！」

だが、こうなってしまうと亮太に勝ち目はなかった。

その後は、再び亮太の部屋で待ち合わせをして買い出しに出かけ、それから帰ると今度はバイトに出かけ…という状態で、瞬く間に一日が過ぎていく。バイトを終え、マンションに帰宅したのは午後十時半近かった。

「ふー」

溜め息をつきながらどさりとベットに倒れ込む。チーフが抜けてしまった分、ベテランの亮太に色々な仕事が入ってきてしまい、いつも以上に疲れてしまった。おまけに、明日は十時に待ち合わせなのだ。これに遅刻することは許されない。絶対に。

ローテールの方を見ると、典子を作ってくれたのであろう料理がラップされて載っている。急に空腹を覚えた亮太はむくりと起きあがると、料理を食べる事にした。

いくつかに分けてある料理を、ラップをしたまま電子レンジに放り込み、適当にタイマーを回す。グオングオン…という音と共にレンジの中で回転している料理をぼんやりと眺めながら、亮太はもう一度溜め息をついた。

(…食べたなら、ちよつとゲームやって寝るかな…)

視線をレンジからテレビへ、テレビからその前に置いてあるゲーム機へと向ける。

と、突然「ぽんっ」という音が響いた。慌ててレンジの方を見ると、かけていたラップが裂け、あちこちに料理が飛び散っている。

慌てた亮太はレンジの扉を開き、中の皿を手で掴んで…

「あちちっ!!!」

危うく中身を床にぶちまけてしまうところだった。手を振って熱を冷ますと、今度はミトンを取ってそれで皿を掴み、テーブルへと持っていく。そして、今度はスープを暖めていなかった事を思い出し、火にかけてから漫画を読み始めた。そして今度はそれがぐつぐつと煮えたぎっている臭いで思いだし、火を止める。こんな調子で、

漸くテーブルの上に典子の作ってくれた料理（今ではその残骸と化していたが…）がそろったのはそれから暫く経ってからのことだった。

惨めな気分ですれらを平らげ、一息ついたのは既に十二時近くになっていた。

（…もう風呂入って寝るか…）

亮太は暫くゲーム機を恨めしそうに見つめていたが、やがて立ち上がって風呂の支度を始める。どうせ湯船にお湯を張る間が暫くあるのだ。ゲームはその間にでもやればいい。

そう思いながら風呂の支度をし、タイマーをかけてお湯が張れるのを待つ。さてゲームを、と思いテレビの前にどっかりと座り込んだ時、絨毯の脇に落ちているそれが目に入った。

数学の教科書だ。

（あ、そうか、明日の支度もしないと…）

そうして教科書を机に戻そうとしたが、ふと気になって教科書をめくってみる。相変わらずそこに書かれているのはワケのわからない式ばかりだ。

（…あんまり出来ないと美雪に呆れられちゃうよ…）

不意に典子の言葉が思い出され、亮太は身震いをする。よく考えてみれば、まるっきり分からないものを教えてもらおうとするなんて少し無謀だったのではないだろうか。せめて、典子にでも少し教えてもらってからの方が良かったのではないか…。

何より、馬鹿なんじゃないかと思われないだろうか…。

今更ながら、亮太は教科書のかなり前の方を開いてそこに書いてあることが分かるかどうかざっとチェックしていく。今からそれだけのことをやるうとするには間に合わないから、せめてどの辺から分からないのか調べてみて、分からないところはどこが分からないのか言えるようにはしておこうと思ったのだ。

「んーと、xが…」

亮太が数学にここまで一生懸命になったのは生まれて初めてかも知れない。ふと気がついて時計を見た時には、二時間近くが経過していた。

手元に置いて置いたタイマーは、止まっていた。もちろん、亮太にはタイマーを止めた記憶も、お湯を止めた記憶もない。

「……！」

慌てて風呂場に駆け込んだ亮太を、もうもうとした湯気が出迎えたのだった。

そして、日曜日になった。いや、正確には日曜日の朝が来た、と言うべきか。亮太が寝たのも既に日曜日ではあったからだ。

「むー」

慣れない事で夜更かしをしたせいか、少し頭が重い。だがさすがに、今日のこれからのことを考えると眠気はすぐに覚めてしまった。早く支度をしなければ。

時計を見るとまだ後二時間ほどあるが、ノンビリはしてられない。亮太は手早くシャワーを浴び、髪を整えると、鞆に教科書や筆記用具などを詰め込む。

さて、それからが問題だった。

一体、何を着ていこうか。

何しろ、今まで典子以外の女の子と私服姿で会った事などほとんどなかったし、典子と会う時には服装を気にした事などない。

取り敢えず、ジーンズやらTシャツやらをあれこれ引っ張り出し、比べてみる。

「……」

十分経過。

十五分経過。

悩んでいるうちにもどんどん時間は過ぎていく。

亮太は暫くの間時計を横目で睨みつつじりじりしていたが、結局、普通のジーンズに白のTシャツという格好にした。

というより、それしかなかったのだが。

支度を終え、時計を見てみると既に待ち合わせ場所の駅まで自転車で行かなければ間に合わない程になっている。亮太は自転車の鍵をひつつかむと、慌てて部屋を飛び出した。

自転車をかつ飛ばし駅に着いた時には、既に美雪がいて、なにやら背の高い外国人らしきおじさん達と話をしていた。どうやら道を教えているらしく、おじさん達の持っているメモと道路を交互に指し示している。しかも、話しているのはどうやら英語のようだ。

亮太は邪魔にならないように、そして後ろで黙って話を聞いているおじさんに間違っても英語で話しかけられないように、少し離れたところでその様子を観察していた。

真っ白な、丈の長いワンピース姿の美雪は、いつもの制服姿とまた違った印象で亮太の目に眩しかった。何より、大きめに開いた襟切りからのぞく肌の微妙なラインと、短い袖からのぞくすわりとした細い腕が特に眩しく、直視できない程だ。さらに、それらがワンピースの白さに負けないほど白いのだ。亮太でなくともどきまぎしてしまうことだろう。

その証拠に、美雪のいる辺りはひときわ人目を引いていて、亮太は急に何の変哲のない自分の格好が恥ずかしくなってきた。

そんな中、その美雪のほっそりとした指に巻かれている真新しい絆創膏だけが不釣り合いなものに思えたが、それさえも一つのアクセントに感じてしまえる程だ。

やがておじさん達が礼を言って言ってしまうと、亮太は美雪に近づく。

「ご、ゴメン、俺の方からお願いしたのに…」

遅れてきた事を謝りながら、亮太は俯いた。何だか自分がひどく不釣り合いなような気がしてきたのだ。急に暑さが増してきたように思えたが、それは何も自転車を飛ばしてきたためだけではないようだった。

「ううん、平気。今ちようど着いた所だったから」

「そ、そうなんだ」

亮太はぎこちなく答えながら自転車を引いて歩き始める。ふと気が付くと、視界の端で何人かの派手な格好の若者達が亮太の方を睨み、舌を鳴らしているのが見える。

「それにしてもすごいね、英語、しゃべれるんだ」

優越感と、劣等感とにさいなまれながら、亮太は口を開いた。

「そんなでもないの。見よう見まねというか…ほら、『門前の小僧習わぬ経を読む』ってあるでしょう？」

美雪は頬をほんのりと染め、はにかんで答える。

「う、うん」

聞いたことがあるような気もしたが、どういう意味なのか、今ひとつ思い出せない亮太は曖昧な返事を返して誤魔化す。内心、誤魔化しがバレないかビクビクしていた。

「父の仕事の関係で、外国の方の知り合いが多いものだから、自然と」

「あ、ああ、成る程ね」

先程の『門前』がどういう意味か、何となく亮太にも飲み込めてくる。つまり、小さな頃から手ほどきを受けてきたということだろう。

「そんなに小さな頃から英語習ってるなんて、すごいね」

「え？ ええ…習っているというほどでもないけど」

どうやら自分の予想が当たっていたらしいという感触を得た亮太は、勢いづいて話し続ける。

「やっぱりそういう学校に行ったの？」

「…？」

気が付くと、美雪はキョトンとした顔をしている。亮太は唐突に気づいた。

「やばい…！」

どうやら意味が違っていたらしい。

「いやはは、なーんて。あ、あれが図書館なんだけど」

慌ててそう言つて、公園の木々の茂みからのぞく図書館のレンガ色の建物を指さす。

そんな亮太を見つめて、美雪がクスリと笑つた。

「武内君、この前の国語の時間、聞いてなかったでしょ？」

亮太は恥ずかしそうにくくりと頷き、罪を認める。

「『門前の小僧』って、日頃接していると習つてもいないのに出来るようになるっていうような意味よ」

「…勉強になります…」

恥ずかしさで精一杯身を縮めながら、亮太は呟いた。

図書館は駅から歩いて五分ちよつとの所にある、公園に隣接して建っている。図書館自体は大して大きくもなく、蔵書の量もそれほどのもでもないのだが、公園の方はなかなか立派で貸しポートのある池まである程だ。

「そう言えばこの公園って大きな池まであるんだね」

木立の間から垣間見える池を見て美雪が感心したように言う。

「う、うん。その代わり、図書館は大した事ないんだけどね」

そう亮太が答えると美雪がクスリと笑つた。その笑顔が、またかわい。

「『その代わり』って事もないと思うけど」

「そ、そうだね」

亮太は上がってしまったのか、既に自分が何を言っているのかよく分からなくなっている。頭がぼーっとしてしまっていて、ただ、美雪が側にいる、それだけだった。

「どうしたの？」

そんな亮太を見て美雪が怪訝な顔をする。

「い、イヤ、何でも。自転車止めて来ちゃうからちよつと待つて」

そう言つと、亮太はそそくさと建物の裏手の自転車置き場へと行く。そして、そこで一つ大きな深呼吸をした。

(何やってんだ、しつかりしないと！)

亮太は心の中でそう言い、心を落ち着かせる。それと同時に、こんな事をするのではなかったという後悔が頭をよぎる。ボロが出て嫌われてしまうのではないか…。そんな不安から出たものだ。

(しつかりしろって！！)

何しろ、まだこれからなのだ。今からこの調子では先が思いやられてしまう。あまり不自然でない程度にそうして心を落ち着かせた後、亮太は美雪の許へと戻った。

図書館の中はやはり、と言うか何と言おうか、あまり人はいなかった。それでもさすがに司書のいるすぐ側は気が引けたので、なるべく端の方に席を取り、勉強を開始する。昨日少しは教科書を読んだとはいえ、そんな付け焼き刃ではどうにかなるものでもない。

しかし、それでもどの辺りから分からなくなっているのかぐらいは見当が付いたので、いくらか美雪の負担が軽減できたのかも知れない。それに、亮太自身常になく理解するように務めていたので、それから二時間もする頃にはどうにか目鼻が付いた格好にはなっていた。

「だから、ここのxにこの値を代入すると…」

グウ

二人の集中を破ったのはその音。それとも、亮太自身のお腹の抗議の声と言うべきか。だった。

突然響いた音に一瞬びつくりしていた美雪がすぐにクスリと笑う。亮太は恥ずかしくて耳まで真っ赤にしていた。そう言えば、すっかり忘れていたが時間がなかったので朝は食べてなかったのだ。

「え、えーと、ここに代入するんだよね…」

気を取り直して続けようとした亮太に、

ググウ〜キュルル〜

再び、お腹が抗議する。

「休憩にしましょうか」

悪戯つぽく微笑みながら美雪が言う。亮太は苦笑いしながら頷いた。

一度気になると、もう勉強どころではなかったのだ。

昼食は近くのコンビニでおにぎりを買い、それを公園で食べる事にした。

公園内はデートでもしているのだろうか、若いカップルでにぎわっている。特にボートは人気があるようで、池には色とりどりのボートが浮かんでおり、そこにはカップル達が二人だけの世界を作って浸りきっている。

(あんな風になれたらいいのに…)

その様子をぼんやりと見つめていたせい、美雪が怪訝な声を上げた。

「どうしたの？」

「あ、い、いや、何でも。涼しそうだなって」

亮太は慌てて誤魔化す。その言葉に、美雪も亮太が見ているのと同じ方を見つめ、咳く。

「そうね…。ホントに、涼しそう」

「…乗ってみる…？」

気が付いた時には、さらりと言葉が出ていた。あまりの自然さに自分自身でも驚いた程だ。

「え!？」

驚いた顔で美雪が亮太の方を見る。亮太は慌てて付け加えた。

「い、いえ、別に変な意味じゃなくて、涼しそうだから、と思って」

「え、ええ。そうね。…でも、まだ勉強の方やりかけ…あ、さては飽きてさぼりたくなっただんでしょ？」

そう言っつて美雪が悪戯つぽく微笑む。

「ば、バレたか」

引きつった笑顔でそう答え、何とか誤魔化した。

「ダメですよ、今日はみっちり数学を勉強していただきます」  
おどけた調子で言う美雪に調子を合わせ、苦笑いする。何気ない  
風を装いながらも、亮太はちょっとがっかりしていた。

せつかく言葉がさらっと出でくれはしたのだが、問題はそのタイ  
ミングが悪すぎたのだ。

「じゃ、行こうか」

内心悔しがりながらもそう促し、歩き始める。

そうして二人はどうか空いているベンチを見つけ、腰を下ろし  
た。ちよつとした木陰になっていて、風さえ吹いていればなかなか  
快適だ。

(何か話さなきゃ…)

気ばかり焦るが、さりとして会話のネタも浮かばず、時折美雪が話  
し、亮太が「うん」とか、「そうだね」と言った極つまらない相づ  
ちを打つ以外はほとんど会話らしい会話もなく黙々と食べていく。

そのうち美雪のほうでもネタが尽きたのか、はたまた別の理由か  
らか次第に無口になり、終いにはお互い無言になっていた。

(つままない奴と思われてるんだろうなあ…)

半ば諦めに似た気持ちで、亮太は食事を終える。程無くして美雪  
も食べおわり、漸く亮太が自分から口に出せた言葉は、

「行こうか」

の一言だけだった。

午後の時間も午前と似たような感じで進んでいった。いくらか違  
うとすれば亮太が昼の失敗を気にして落ち込んでいた事ぐらいだ。  
それもほんのわずかな時間の話で、ほとんどの時間は午前中にやっ  
た事の確認のための問題を解いていく作業に没頭していた。そのた  
め、時間は瞬く間に過ぎていき、おおよそ終了したのは三時を回っ  
た頃だった。

「ふー」

心地よい疲労感を感じながら、亮太は思わず溜め息をつき、いろ

いる書き込まれたルーズリーの束を見つめる。今までこんなに勉強したことなど無いと自信を持って言えるほどだ。

「お疲れさまでした」

美雪がそんな亮太の様子を見てぺこりとお辞儀をしながら言う。

「こ、こちらこそ。今日はわざわざありがとうございます」

亮太もお辞儀を返した。それを見て、美雪がクスリと笑う。亮太もつられて笑った。

それから、二人は後片付けをして図書館を出た。

外はまだまだ熱気が残っていて、出た途端にじんわりと汗がにじんでくる。

「ま、まだ暑いね」

「そうね。もうすっかり夏ね…」

そんな事を話しながら二人はゆっくりと公園の中を歩いていく。カップルの姿は昼間よりは減っていたが、まだまだあちこちで仲睦まじく寄り添って歩いたり、ベンチで語ったり、アイスクリームを食べている姿を見ることが出来た。

(アイスか…)

そのカップルは一つのアイスクリームを二人で交互に食べている。

(…アイス…)

亮太はゴクリと唾を飲み込む。それまで普通だった心臓の鼓動が早くなりはじめ、こめかみの辺りが脈打つ。

(…『アイス食べようか』…)

そう、言えはいいのだ。あくまでもさり気なく…。だが、その意思に反して亮太の心臓の鼓動が早くなり、喉がカラカラに渴き、舌が貼りつく。

(さあ、言うんだ!!)

意を決して、亮太は立ち止まった。だが、言葉のほうは一向に出てこない。

「…君? どう…の?」

美雪が怪訝な表情で尋ねるが、それは亮太の耳には届いていなか

った。

(さあ、言うんだってば!!)

自分のなかで大声で叫んでいる声でいっばいだっただ。

「あの、武内君？」

立ち止まっっている亮太の顔を覗き込むように美雪が声をかけ、亮太の腕をポンポンと叩く。それが引き金となった。

「あ、あああのっ!! アイス!!」

そう叫びながら美雪の両腕をしっかりと掴む。

「!?!? アイス!?!?」

あまりの事にギョツとしたのか、美雪は半ば怯えるような表情になって亮太を見つめている。その瞳に見つめられて、亮太ははっと我に返った。

「あ、い、いや、そのー、アイス食べたいなー、と思って…」

美雪を掴んでいた両手をさつと後ろに隠し、慌ててごまかす。

少し先にあるアイス屋のほうをちよつと見てから、美雪はクスリと笑った。

「え、あ、なんだ…びつくりしちゃった。ちよつと待ってて」

それから、小走りでアイス屋の方に駆けていく。

「あ、ちよつ…」

慌てて亮太が追おうとした時には既に半分ほど行ってしまっている。そこでちよつと立ち止まった美雪はくるつと振り返り、

「いっけない。失敗しちゃった」

と声を上げる。

「ど、どうしたの!?!?」

慌てて亮太が美雪の許まで行こうとすると、美雪は悪戯っぽく微笑んで続けた。

「武内君が何にするか聞いてなかったの」

何だか身構えていた自分が馬鹿らしくなり、亮太はふつと肩の力を抜き、微笑んだ。気取ってみても仕方ないのだ。口下手でも何でも、相手に気持ちは伝わればそれでいい。

そう考えたら、言葉がつかえることなく自然と出てきた。

「いや、俺が買ってくるよ。綾瀬さんこそ、何がいい…って、行って見ないと分かんないね」

亮太は苦笑した。ここからでは遠すぎてアイスのメニューに何があるのか良く見えないのだ。

「そうみたい。…一緒に行きましょうか」

結局、二人は一緒に買いに行くことにした。だが、『今日一日、勉強に付き合ってくれたことへのお礼として』、代金だけは亮太が払うと言っけなかった。美雪は最初は別に気にしなくてもいいと言っていたが、結局は亮太に従った。

「ごちそうさま、武内君」

「どういたしまして。ホントはこんな安いものじゃきかないけど」  
亮太は苦笑した。今日一日付き合ってもらって三百円そこいらでは安すぎる。

「その気持ちだけで十分よ。あたしにも勉強になったもの」

「そ、そうなの？ 何かいろいろ面倒な思いさせちゃったけど…」

「あ、じゃあ…」

そう言っと思わせぶりに言葉を切ると、美雪は悪戯っぽく微笑む。

「え？」

「テストで結果を出してもらおうかな？」

「はは…」

亮太は引きつった笑いを返した。それだけは何とも言い兼ねる。

「大丈夫よ、後は問題集やったりして慣れるだけ」

「う、うん、ありがとう」

話しながら二人は池の辺に来ていた。池にはまだ何艘ものボートが浮かんでいる。亮太は引いていた自転車を止めると、池の周りの柵に寄り掛かってアイスを食べた。

時折吹き渡る風が心地よい。美雪の方をちらりと見ると、水面をぼんやりと見つめている。ふと気が付くと、美雪の頬にチョコチップが一つ、ついている。

「チヨコ、ついてるよ」

「え？ どこ？」

「ここ」

亮太は自分の頬のちょうどその辺りを示すのだが、なかなか取れない。

「ちよつといい？ じつとしてて」

そう言って亮太は自分で取って美雪に見せた。美雪は恥ずかしそうに頬を染め、微笑む。

「…ありがとう」

「ど、どういしまして」

ふと気がつくと、美雪の顔がすぐ近くにあった。大きな、濡れたような瞳、長い睫、白い、つやつやとした肌、そしてふっくらとした唇…。それらが息の届きそうな距離にあるのだ。

ドキリ

二人ともその事に気がついたのか、真っ赤な顔をして俯いた。そして、まるでそれに熱中しているかのように、黙ってアイスを食べ続けている。

少なくとも亮太にとってはそれはただのポーズでしかなく、頭の中は次に美雪にどう話しかけようか、と言うことしか頭になかったのだが。

(ポート…)

亮太はちらちらと横目でポートを盗み見る。だが、言葉を出そうとしても先程のようには行かなかった。怖くて言葉が出でこないのだ。心臓の鼓動ばかりが無闇と高まっていき、それがさらに唇の動きを鈍くさせていた。

(さつきは言えたのに…)

ふと気が付くと、恨みがましく思いながら黙々とアイスを食べていたせいか、すぐに食べ終わりそうになってしまう。またちらりと美雪の方を見やると、美雪の方はまだ半分ぐらい残っていた。亮太は慌ててペースを落とす。

それでも、いくらも経たないうちに終わりはやってきた。亮太はコーンカップの最後の一口を恨めしそうに見つめ、それから口に放り込む。

その時、美雪が口を開いた。

「ボート、乗ってみます？」

「！？ ゲホゴホゴホ……」

突然の事に驚いた亮太はむせてしまう。驚いた弾みでアイスの欠片が気管の方に入ってしまったのだ。

「あ、ご、ごめんなさい、急に話しかけちゃったから……」

慌てて美雪が真っ白なハンカチを差し出す。亮太はハンカチを差し出す美雪の手を片手で制し、もう一方の手で胸をどんと叩いた。

今、確かに『ボート、乗ってみます？』と言ったのだろうか。

それとも、都合のいい聞き間違いだったのか？

亮太には自分の耳が信じられなかった。

「ご、ゴメン、もう一度言って」

暫く経ち、咳がおさまると、亮太はまずそう尋ねてしまう。

「いえ、あの……さっき言ったでしょ、ボート乗ってみる？ って

……」

「あ、う、うん、……でも、いいの？」

「武内君さえよければ、あたしは……」

そう言いながら、恥ずかしいのか美雪は俯いた。実は結構乗り気なのかも知れない。

「じ、じゃあ行こうか」

亮太が言うと、美雪はこくりと頷く。二人はそろって貸しボートの受付に向かった。

大して広くはない池ではあるが、回りから眺めているのと、ボートに乗って水面から回りを眺めるのでは大分感じが違っていて、行き慣れた公園であるにもかかわらず初めて訪れた場所であるような

新鮮さを味わっていた。

時折水面を吹き渡る風が心地よく頬を撫でていく。

水の上は思っていた以上に涼しく、のんびりと漕いでいる限りはそんなに暑さを感じないほどだ。本来はもっと楽そうな足漕ぎボートもあつたのだが、やはり雰囲気が、と言つことで手漕ぎボートの方を選んだのだ。

だが、たった一つの難点は思っていた以上にボートを真つ直ぐに漕いでいくのが難しいことだった。右と左、両方の力配分が均等になるようにしていないと、すぐにどちらかに傾いていつてしまう。さつきから亮太の漕いでいるボートは細かく蛇行しながら走っているようで、ともすれば他のボートに当たりそうにさえなってしまう。そのせいか、美雪もなんだか落ちついてはいられないようだった。

「あ、武内君、もっと左行かないと…」

「こ、今度は右に…」

こんな調子だ。亮太は無謀にも手漕ぎボートにしてしまったことを後悔し始めている。

「ご、ごめんね、綾瀬さん。やっぱり足漕ぎボートにしてれば…」

池の真ん中辺りで一息ついた亮太は、美雪に謝る。だが、美雪は微笑んで首を振った。

「ううん、凄く楽しいの。ありがとう、武内君」

「い、いやそんな…」

美雪に微笑みかけられて、亮太は天にも登る心境だった。頭がぼわーんとして、何だか地に足がついていないような気分だ。いやもちろん、ボートの上にいるのだからその通りではあるのだが…。

「今度はあたしにもやらせて」

そう言つて、美雪が立ち上がる。

「あ、うん。揺れるから気をつけて」

ぐらぐら揺れる不安定なボートの上ではあまり乱暴に動いたり、立ち上がるのは危険だ。そろそろと半ば這うようにして美雪と入れ代わる。

「えと…これを…こう…」

へさきの側に座った美雪は見よう見まねでオールを掴み、ぎこちない動きでボートを漕ぐ。だが、最初の一かきは派手に水しぶきが上がつて亮太にかかったただけだった。

「わぷ！」

「ご、ごめんなさ…きゃっ！！」

慌てて美雪が立ち上がり、亮太の方に行こうとしたのでボートが大きく揺れ、その弾みで亮太の上に覆いかぶさるようにして倒れ込んでしまったのだ。

「だ、大丈夫！？ 綾瀬さん！？」

そう声を出してはみるのだが、上に美雪が覆い被さってしまったので思うように動きが取れない。

「あ…へ、平気…武内君こそ大丈夫？」

漸く、腕で自分の身体を支えられるようになった美雪が答える。

ちょうど亮太の上に覆い被さってしまったので、そうしていると亮太の目の前にすぐ美雪の顔があるという恰好になっている。

「お、俺なら大丈夫…」

そう答えながら、二人はそのままの恰好で暫し見つめ合っていた。服ごしに、お互いの肌の温もりと息づかい、そしてお互いの心臓の鼓動を感じていた。

(…綾瀬さんの身体って温かいなあ…それに、心臓がドキドキしている…)

それが、亮太には何となく嬉しかった。もちろん、亮太自身のもドキドキと早鐘のように打っている。自分と同じことを感じている…かどうかは分からないが、美雪がドキドキしてくれていることが嬉しかったのだ。

ずっとこのままでいたい。ずっと美雪の心臓の鼓動を感じていたい。

亮太はそう思った。そして、実際、時が止まり、今この時間が永遠であるかのようにも感じていた。

だが、それは急に破られることになる。

はっと我に返った亮太は、

「…あ、あの…」

と控えめな声を出す。顔が、いや身体全体が熱くなっていた。ずっとこのままでいたいのには山々だが、周りの目もあるし、そうでなくともあまりこんな恰好でいるわけにはいかない。

「あ…ご、ごめんなさい」

その声で我に返ったのか、美雪も恥ずかしくそうに真っ赤な顔をし、てゆっくりと身体を起こす。

お互い、しばらくは恥ずかしくて相手の顔を見られなかった。

ややあつて亮太が、

「そ、そろそろ行こうか」

と言うと、美雪も

「そ、そうね。行きましようか」

ときこちなく答え、亮太は受付の方にボートを漕ぎだす。その間ずっと、お互いの顔を見ることも、言葉を交わすこともなかった。恥ずかしくてそれどころではなかったのだ。

だが、それからいくらかも行かないうちに美雪が

「あら？」

と呟いて陸の方を見た。亮太が怪訝な顔で美雪が見ているのと同じ方を見つめ、尋ねる。

「ど、どうしたの？」

「…い、いえ…」

そう答えながらもそちらをじっと見つめていた美雪だったが、やがて諦めたように微かに首を振ると

「…ごめんなさい、ただの見間違えだったみたい」と答える。

「な、何を見たの？」

「…うん…それが…何か見覚えのある後ろ姿だと思ったんだけど

…もしかしたら単なる気のせいかも」

そう言いながらも美雪はまだそれが何だったのか思い出そうとしているような様子だ。

亮太ももう一度そっちのほうを見てみたが、亮太には分かりそうになかった。

「ごめんなさい、変な事言っちゃって。たぶん気のせいなんだと思う」

そんな亮太の様子を見て、美雪が謝る。ちょうどその頃ボートがそろそろ受付に帰り着こうとしていたので、その話はそれっきりとなった。

「今日は色々ありがとう」

その後、美雪を駅まで送ると、亮太はそう言って深々と頭を下げた。

「どういたしまして。それに、さっきはホントにごめんなさい」  
美雪はまた恥ずかしそうに頬を染め、頭を下げる。

「い、いや…こちらこそ…」

亮太も真つ赤な顔をして頭を下げた。さっきの感触を生々しく思い出してしまったのだ。

しばらくそうして俯いている二人を、通行人が不思議そうな顔をして通りすぎていく。やがて美雪が

「そ、それじゃ、そろそろ行くね」

と言って腕時計を見た。その時、またほっそりとした指に巻かれた絆創膏が目につき、亮太は尋ねる。

「その指、どうしたの？」

「え！？ あ、これ？ な、何でもないの」

曖昧に答えながら美雪は指を身体の後ろに隠す。頬がほんのりと染まっついていて、何か恥ずかしがっているようだ。

「ふうん…お、お大事にね」

「あ、う、うん。ありがとう。じゃ、行くね」

「うん。ホントに今日は色々ありがとう」

亮太がそう言うと、美雪は悪戯っぽく微笑んで

「これでテストはばっちりね？」

と付け加える。亮太は苦笑した。

「あ、それじゃ。電車が来ちゃうから」

「ご、ごめん。…それじゃ、また明日」

「ええ、また明日」

そう言ってもう一度ぺこりとお辞儀をすると、美雪はくるりと踵を返し小走りに階段を駆け上がっていく。

不意に、充実した疲労感が亮太を襲ってきた。そして、眠気も。

「ふあゝ」

大きなあくびをしながら、亮太は自転車に乗る。ちょうど傾きかけた太陽のある方角が亮太の部屋のある方だ。

「ふあふへってふえふかな（帰って寝るかな）」

そう、あくび交じりに眩きながら、亮太は夕日に向かって自転車を漕ぎはじめた。

その頃、動き出した電車の中では、窓から同じ夕日を眺めながら美雪が溜め息をついていた。

(…お弁当作ろうと思って、指怪我しちゃったなんて…)

美雪は以前に見た典子の鮮やかな包丁さばきをちらっと思いつく。

(…言えないわよねえ…やっぱり…)

心の中でそう眩き、もう一度、美雪は溜め息をついた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9718e/>

---

セピア6 Never Give UP!

2011年1月9日14時35分発行